

# I. スポーツ社会学研究

## 1. スポーツ社会学研究の対象と方法

### — その基礎的作業 —

早川 武彦

#### I. 報告の位置づけ

本報告は、「スポーツ社会学」なるものがいかなる対象と方法をもつ学問であるかを検討するための基礎的な作業の一環として、これまでの「スポーツ社会学」研究が取り扱ってきた研究領域・対象とその方法を概観することにある。しかし、時間的制約もあり、今回は、手元にある各国の主要な「スポーツ社会学研究」に関する出版物の目次整理とその若干の分析を試みる程度にとどめざるをえない。

#### II. 資料確認と読み方

資料（別紙）は、以下に見る諸文献の目次一覧である。これらの資料は、とりあえず「スポーツ社会学」研究に関わる「概説」を何等かの形で試みているものである。また当然ながら、ここに示されていないもので「スポーツ社会学」研究に論及しているものもある。それらのものについては今後の作業で補充していくことになろう。

#### III. 先行「スポーツ社会学」研究の対象・領域・方法の傾向

以下では、各文献目次（ここでは紙面の都合でタイトルのみ、目次は割愛）を年代順、国・地域別に眺めながらその変化や差異・特徴について見る。

##### 1. クロノジカルな分類整理

1960年代以前：

1921=H. Risse, Soziologie des Sport

1966=竹之下休蔵『スポーツの社会学』

1970年代まで：

1971=（竹之下休蔵・菅原禮編『体育社会学』）

78=D. Grieswelle, Sport Soziologie

78=D. Voigt, Soziale Schichtung im Sport

79=W. Hopf, Kritika des Sportssoziologie

1980年代以降：

1980=W. M. Leanad II, A Sociological Perspective of Sport

80=森川貞夫『スポーツ社会学』

81=F. Buechl, Der Sport in der modernen Gesellschaft

81=A. Wohl, Soziologie des Sports; Allgemeine Theoretische Grundlagen

82=A. O. Dunleavy/ A. W. Miracle/ C. R. Rees, Studies in The Sociology of Sport

82=B. Rigauer, Sportsoziologie; Grundlagen Methoden Analysen

84=菅原禮編著『スポーツ社会学の基礎理論』

86=P. Paribas, Elements de Sociologie du Sport

87=R. Thomas/Haumont/Levet, Sociologie du Sport

88=森川貞夫／佐伯聰夫編『スポーツ社会学講義』

89=D. S. Eitzen/ G. H. Sage, Sociology of North American Sport

90=亀山住明編『スポーツの社会学』

93=C. C. Vogler/S. E. Schwartz, The Sociology of Sport

93=R. Thomas, Sociologie du Sport

93=C. C. Vogler/S. E. Schwartz, The Sociology of Sport

下線部分に見られるように、「スポーツの社会

学]なのか「スポーツ社会学」なのか、前者から後者へと明確な研究方法上の違いがあるのかないのか、まずこの点がはっきりしない。またその内容としてのスポーツ社会現象の切り取りかたにおいても年代的にその変化が若干見られる程度である。70年代までは、「スポーツの社会学」であり、80年代になって「スポーツ社会学」へと変化してくる。しかし、これも次の地域的な傾向と関わるもので、現時点ではそれほど明確な区別がなされているようには思えない。

## 2. 地理的分類整理

米国：

- 1980=W. M. Leanad II, A Sociological Perspective of Sport  
 82=A. O. Dunleavy/ A. W. Miracle/ C. R. Rees, Studies in The Sociology fo Sport  
 89=D. S. Eitzen/ G. H. Sage , Sociology of North American Sport  
 93=C. C. Vogler/S. E. Schwartz, The Sociology of Sport

独：

- 1921=H. Risse, Soziologie des Sport  
 78=D. Grieswelle, Sport Soziologie  
 78=D. Voigt, Soziale Schichtung im Sport  
 79=W. Hopf, Kritika des Sportsoziologie  
 81=F. Buechl, Der Sport in der modernen Gesellschaft  
 81=A. Wohl, Soziologie des Sports; Allgemeine Theoretische Grundlagen  
 82=B. Rigauer, Sportsoziologie; Grundlagen Methoden Analysen

仏：

- 1986=P. Paribas, Elements de Sociologie du Sposrt  
 87=R. Thomas/Haumont/Levet, Sociologie du Sport  
 93=R. Thomas, Sociologie du Sport

日：

- 1966=竹之下休蔵『スポーツの社会学』

1971=(竹之下休蔵・菅原禮編著『体育社会学』)

80=森川貞夫『スポーツ社会学』

84=菅原禮編著『スポーツ社会学の基礎理論』

88=森川貞夫/佐伯聰夫編『スポーツ社会学講義』

90=亀山住明編『スポーツの社会学』

「スポーツの社会学」から「スポーツ社会学」への明示的な語法の変化は、ドイツと日本にみられる。しかし、それが研究方法上の違いによる明確な意図を反映したものとは思えない。したがって、研究方法の上では、先行する「社会学」の研究方法を借用することが一般的であり、独自の研究方法をまだ提起し得ていないように思われる。以下にこの点を見てみる。

## IV. 「研究方法」上の問題

### 1. 既存学問分野・領域の研究手法依存

これまで「スポーツ社会学」研究は、以下の文献が示すように既成の学問、とりわけ社会学に習(倣)って誕生してきた。何でもありの社会学からすれば、「スポーツ社会学」は「スポーツ」を対象とした社会学であり、社会学の一領域・セクションにすぎないといえよう。

\*竹之下休蔵『スポーツの社会学』(1966)

「スポーツの社会学は、社会学の特殊的・専門的分野として、また、スポーツ科学の基礎部門として、スポーツの事実や問題を社会的観点から、実証的・客観的に研究しようとする。」(p. 18)  
 従って、社会学的研究の登場する背景には、第1に「スポーツの大衆化の可能性や必要性がたかまったこと・・・現代社会を特色づける諸条件がスポーツの大衆化を可能にし、かつ必要ならしめている。それが主として社会的要因によるものだけに、その度合いを高め、促進のための合理的方策を立てるためには社会学的研究が必要である。」

第2に、「スポーツの高度化が顕著となった。それは新しいスポーツの概念規定を必要とする程

度のもの」である。「今日のスポーツ（は）、  
・ ・ ・ 経済や政治とかかわり合い、イデオロギーや  
社会体制の相違が絡む複雑な面をもつようになった。ここにも社会学的研究を必要とする多くの問題が見いだされる。プロ・スポーツの組織化を加えるべきである。」(pp. 17-18)

「スポーツの社会学は、  
・ ・ ・ 社会学の理論や方法  
を忠実に取り入れなければならない。同時に、  
このような学問領域の変化や融合に注意を払う  
ことが必要である。スポーツの問題は  
・ ・ ・ 経済や政治と関係し、  
また、歴史的背景を考慮することが必要である。  
研究の歴史や対象の性質を考えると、  
このような配慮とともに、柔軟性のある考  
え方をとるべきであろう。スポーツの社会学の理  
論構成は、単なる思弁ではなく、経験的な資料に  
もとづいてなされる。それは、社会科学的方法  
といわれているもののなかに求められる。」(p.  
19)

「スポーツの社会学は、社会的事実あるいは問  
題としてのスポーツを、実証的・客観的にあるが  
ままにとらえればよい。」(p. 21)

ここでは「スポーツ社会学」が「社会学の理論  
や方法を忠実に取り入れ」、「社会的事実ある  
いは問題」としてスポーツを「実証的・客観的にあ  
るがまま」にとらえることであるとしている。こ  
の考え方や方法は、我が国の「スポーツ社会学」  
研究においてその後も忠実に踏襲されている。

\*A. Wohl, Conception and Range of Sport  
Sociology, International Review of Sport Soci-  
ology, vol. 1, 1965. 1: 「スポーツ社会学は、ス  
ポーツおよびスポーツの社会的機能と関連する社会  
現象について記述し、研究する経験科学である。  
それは、スポーツの発展を促進あるいは妨害する  
社会的諸要因について研究してこの発展を規定す  
る法則を明らかにし、また、われわれが望んでい  
る世界における、そしてこの研究に基づくところ  
の、スポーツの新しいヴィジョンに役立てようと  
する。」ここで取り上げられている内容は、①娯  
楽の特殊形態としてのスポーツ ②競技をめぐる

問題、競技者や観衆及びその相互関係、③スポ  
ーツによってつくられる特殊な結合や社会構造。仲  
間関係、国際関係、宗教、人種、政治問題など  
④スポーツの社会的機能、大衆化の促進に関する  
問題、である。

スポーツを「社会的諸機能と関連」する「諸事  
象」ととらえ、スポーツが発展するための「新し  
いビジョン」を描くことにあるとしている点が注  
目される。

\*Conrad C. Vogler/Stephen E. Schwartz; The So-  
ciology of Sport, 1993: 「スポーツ社会学は、  
スポーツにおける役割、関係、相互行為のネット  
ワークに関わる研究であり、スポーツの制度的な  
本質へのこれら研究成果の適用に関わる研究であ  
る。それは、一つの制度はその社会における生活  
の質の追求にとって重要と思われる機能を担って  
いるからである。」(pp. 5-6)

スポーツの社会的な価値を意識し、これがどの  
ように機能しているか、またすべきかを「制度的  
な本質」との関係で追求することを「スポーツ社  
会学」研究の課題と見ている。

\*竹之下休蔵／菅原禮『体育社会学』（10版）現  
代保健体育学体系3、1971: 本文献は、「体育  
社会学」の対象・領域・方法(pp. 4-12)であり、  
「スポーツ社会学」とは若干対象・領域・方法が  
異なるが、参考例としてみておくことにする。

【対象】: ①体育とは何か ②体育の社会的側面

【領域】: ①方法論の領域; 体育社会学史、体育  
社会学の使命、隣接科学との関係など  
②記述と説明に関する領域; 体育活動、  
体育活動の形態・構造・機能のほとん  
どの領域にわたり、非常に多くの課題  
が残されている領域。

③実践と計画という領域では、体育の  
社会化が課題とされるであろう。

【方法】: 研究方法は、対象の性格によって規定  
される。

アメリカ的: 自然科学の方法を社会現

象の分析にも適用する。

ドイツ的：自然科学と社会科学の差異を認め社会科学のために、その取り扱う素材の特殊性に適した方法論を確立する。

フランス的：定量調査の方法、定性的方法、調査の分析における数学的方法

ここには、国ごとに研究方法が異なっていることの指摘がなされている。この指摘は大変重要である。「研究方法は、対象の性格によって規定される」がそのことはまた逆に、「方法が対象の切り取り方をも規定する」といえるからである。

「スポーツ社会学」研究に取り組む場合、その方法によって一定の方向性が示されることになる。

\*G. S. ケニヨン/J. W. ロイ, Jr 「スポーツの社会学に向かつて」『スポーツと文化、社会』、1988：「スポーツの社会学は、ある一定のスポーツの領域における人間の社会的行動についての規則性と、それからの逸脱についての研究ということになる。」(p. 9)

「スポーツ社会学は、・・・一つの没価値的な社会科学である。」(p. 10)

先の竹之下・菅原『体育社会学』でいわれているようにアメリカ(スポーツ)社会学の一般的特徴は、「没価値的社会学」である。自然科学のように主観を排除し「あるがまま」に「叙述する」。そのために用いられる方法が統計と調査である。

\*B. D. マックファーソン「スポーツ社会学研究の過去、現在未来の展望」同上、「スポーツ社会学は、社会学の一領域であるとする、スポーツ社会学者は、『社会的行動を説明したり、ある特定の条件での行動を予測したり、行動を理解するために役だつ過程やパターン』(G. A. セオドーソン/A. G. セオドーソン, 1969, p. 401)をスポーツ場面で研究すべきである。さらに、とくにスポーツ社会学者は、いろいろなスポーツ環境にある基本的な社会的単位(個人、集団、制度、社会、文化)と基本的な社会過程(社会化、社会統制、社会的

成層、社会的葛藤、社会変動)を取り扱う。要するにスポーツ社会学は、ある特定の個人や集団に関心をもつのではなくて、むしろ、スポーツに関わる集団の社会的構造、社会的パターン、組織に関心がある。そして、それは、微視的システム

(例えば、あるホッケーチーム)や大きい複合組織(例えば、プロのスポーツリーグ、国際スポーツ連盟)、下位文化(例えば、人種の集団)であってもよいし、また、あるいは、ある社会(例えば、国家)であってもよい。」(p. 18)

「スポーツ社会学の最近の研究」は以下の通りである。①制度化されたスポーツと社会化、統合、同化、葛藤、社会変動のような社会過程との相互関係。②人種の・民族的差別、制度化された攻撃的行動、青少年非行のような社会問題と、複雑な社会組織内の構造や相互作用。

また「スポーツ社会学の可能な研究領域」は、①スポーツと社会変動 ②スポーツによる社会化、スポーツへの社会化、スポーツからの非社会化、スポーツへの再社会化 ③スポーツと社会的成層 ④スポーツと下位集団 ⑤女性とスポーツ ⑥農村の居住者とスポーツ ⑦高齢者とスポーツ ⑧スポーツに固有な社会的問題 ⑨マイナースポーツの組織問題 ⑩競技者の脱落問題 ⑪スポーツと高度大衆消費問題である。

ここでも「スポーツ社会学」は「社会学の一領域」であると考えられており、社会学で取られる方法に真似て「スポーツに関わる集団の社会的構造、社会的パターン、組織」に関心が向き、そのために「社会過程との相互関係」および「社会組織内の構造や相互作用」を問題にする。

\*D. Stanley Eitzen / George H. Sage ;Sociology of North American Sport, 4th ed. 1989 : 本書は、社会学的な観点、概念、成果を用いて、社会に存在するスポーツ制度を説明する。社会学の主要なテーマは、社会的組織に向けられている。スポーツもまた、社会的組織の一部であり、チームやリーグに見られるように、学校、地域社会、国際連盟そして社会の一部をなしている。そこで、

それらの構造や過程原理を理解することであるが、それは、それら社会的組織を創造し、維持し、変革していく点を批判的に見ることである。その際、どのように組織され、誰の力によって、誰が利益をえ、それを得られないものは誰か、という点を見ていくことである。

第一に、スポーツは、社会の小宇宙である。スポーツの見方とは、組織のされ方、つまりゲームのタイプ、競争の度合い、参加者の満足そしてルールの意識の仕方である。ルールは、複雑な社会を理解するための手短な方法だからである。その逆もまた真である。社会的価値、経済タイプ、少数派の扱い方などは社会におけるスポーツ組織を理解する上での観点を与えてくれる。

第二は、スポーツの普及形態である。スポーツは身体形成という原初的な意図から離脱してきた。プレイヤーに向けられていた身体的な競争に代わって、スポーツはスペクタクル、巨大ビジネスそして政治権力の広がり場になってきている。プレイはもはや仕事である。自発性はすでに官僚に握られてしまい、身体活動の喜びは外部からの報酬や金銭に置き換えられてしまっている。(p.19)

ここでは「社会学的な観点、概念、成果」に基づいて「スポーツ制度」を対象とするが、それだけにとどまらず、「組織の構造や過程原理」を説明するだけでなく、「社会的組織を創造し、維持し、変革していく」ための「批判」的視点が強調されている。

以上がそれぞれの文献に見られる「スポーツ社会学」研究対象・領域・方法についての概要である。ここに見られるように、「スポーツ(の)社会学」は、社会学の研究方法来に依存して、スポーツという対象や領域を「制度、組織、集団」などにおける「それぞれのそして相互の役割・機能や関係、パターン」として捉え、それらの構造や過程におけるあり方を批判的に描き出すことのものであるとまとめられよう。

しかし「スポーツ社会学」研究は、「スポーツ」という独自の対象・領域をもち、それが「社会の

小宇宙」であるだけでなく、「社会」への積極的なメッセージをも発進する「文化装置」をもち、社会や人々の生活にとって無視することのできない社会的機能や価値を有している点を描き出す独自の研究方法の模索が求められなければならない。

## 2. スポーツ領域独自の研究方法の確立へ向かって

P. ブルデューは、1980年代初頭、スポーツの社会科学的な研究の障害になっているものに、スポーツ社会学者らが「二重の意味で支配されている(つまり引き裂かれている)」ことにあると指摘した。一方において社会学の世界によって、他方においてスポーツ界によって。(P. Bourdieu, Programme pour une sociologie du sport, Chose dites, p. 203) スポーツ社会学にとっていずれにも従属せず、独自の研究方法を確立することの必要性を彼は説いたのである。同じように、同じ頃、日本でも桑原武夫が「わが国のスポーツ著作(研究)には思想が浅い」と厳しい指摘をしている。(『エコノミスト』1982. 5. p. 4-11)

「スポーツ社会学」研究の独自性をどのように確立していくか今まさに問われているときであるが、なかなかその方法が見いだせないでいる。ここでは、P. ブルデューの方法を概観し、「スポーツ社会学」研究独自の可能性を探るヒントになればとの思いで、彼の方法に学んでみたい。

\*P. Bourdieu「人はどのようにしてスポーツ好きになるか」『社会学の社会学』、(1978年HISPAでの基調演説)「社会学者は、取りあげた対象のうちで、たとえばどんなスポーツ活動がどんな学歴や年齢、性、職業別に分布しているかを示す統計表のような形のもとに、スポーツの実行と消費に出会うわけです。そして、そこから、これこれのスポーツ活動がこれこれの変数と関係があるということの問題にするばかりでなく、これらの活動がそのような諸関係の中で身にまどっている意味そのものを問題にしようとするわけです。」(p. 223-224)

「社会的属性を担った人びとに供給されたスポーツの実行と消費の全体を・・・何らかの社会的需要に応えるために用意された供給として考えてみたい」「第一は、生産空間が存在するか・・・『スポーツ的生産物』を産出するような生産空間、・・・スポーツの実行と消費という世界が存在しうるか。「第二は、多様な『スポーツ的生産物』をわがものとする事ができる社会的諸条件とはどのようなものか。」(p. 224)

「スポーツの実行や消費に直接結びついている諸制度や行為者たちのシステムを構築可能にした社会的諸条件とはいったい何か・・・(この制度や行為者に含まれるものは)公的あるいは私的な『スポーツ団体』・・・スポーツ財(専門の施設、用具・衣類など)の生産や販売者たち、スポーツの実行に必要なサービスの生産者や販売者たち(体育教師、コーチ、トレーナー、スポーツ医、スポーツ記者など)、さらにはショー・スポーツ[見るスポーツ]とそれにかかわる財(スポーツ・シャツや花形選手のプロマイド、あるいは三連勝式馬券など)の生産者や販売者」(p. 224)

「スポーツで生活するこの専門家集団は、・・・どのようにしてつくられてきたのでしょうか」(p. 225)

P. ブルデューは、これまでのように「スポーツ社会学」研究を「社会学」の一領域とするのではなく、「スポーツと社会の関係」をスポーツに内在している「諸制度や行為者たちのシステムを構築可能にした社会的諸条件」から見ようとする。つまり「諸制度や行為者たちのシステムを構築可能にした社会的諸条件」とは、彼によれば「ハビトゥス」(諸性行の体系)によって説明されるものである。この「ハビトゥス」は、その社会や集団が歴史的、社会的に作り出してきたもので、さらにこれからも作り替えていく原理(構造化された構造、構造化する構造)概念である。彼は、そこで、スポーツの独自領域の確定とそこにおける様々な行為や組織の諸要素や機能の諸関係を歴史的、社会的に分析する。

その際、これまでのマルクス主義がとってきた「土台・上部構造」論、単純な経済還元論、経済(資本)をベースにした社会構造論に与せず、新たに文化資本なる概念を導入して人間の生き方(これ自体もハビトゥスによって規定される)を分析の視点に加え人々のスポーツ志向を説明しようとする。曰く、人がさまざまなスポーツのどれを選択実行するかは、まずは①経済資本によって、ついで②文化資本と③自由時間のゆとりによってきまる。このようにスポーツ実践は、単純に経済資本だけで引き起こされるのではなく、個々人がハビトゥスとして内在化させている経済資本+文化資本+社会関係資本の総和によって誘引されるのである。

時間的關係もありこれ以上P. ブルデューの方法を詳細に展開することはできないが、ここからさらに研究を深めていく方向は見えてくるように思われる。例えば、スポーツの文化的な価値がどのようなものとして人々の生活に関わっているか。近代スポーツ(のもつ特長)が今日の社会や生活においてどのような役割を果たしているか。スポーツ権は、すべての人にとっての正当な権利であるのだが、どのような意味と質を持ち、個々人にとって具体的にどのようにして正当な要求となりうるのか。「構造化された/する構造」という「ハビトゥス」の概念からこれまでの伝統的なスポーツから新しいスポーツへの創造はどのように描けるのか。さらに今日「する」、「みる」スポーツの分離論が横行しているが、このことがもたらす様々なゆがんだスポーツ現象をどう説明つけることができるか。など。